

二〇一八年度 卒業論文

沖縄の浄土真宗史について

コピ― 禁廠

L158003

帰依 龍也

第四節 第二次世界大戦後の沖縄の真宗

結論 2

註 2

年表 5

参考文献

コピ― 禁廠

序論

私は幼少期から沖縄県で育ち、仏教、特に浄土真宗の教えが身近にある環境で育ってきた。その中で、「ウー
ートー」等の沖縄特有の宗教用語や亀甲墓かめこうばか、「ウチカビ」と呼ばれる「あの世のお金」を燃やす習慣等、当時は当
たり前と思っていたことが大学で仏教を本格的に学んでいくうちに、本土には存在しない沖縄特有の風習である
ことがわかった。仏教に沖縄特有の風習があるのは、「琉球王国」という一つの国であったことや琉球王国時代か
ら沖縄に根付いているユタやノロ等の宗教者がいたことが関係している。そんな中で仏教は琉球王国に伝わり、
禅鑑ぜんかんを始め多くの僧侶が渡った。特に浄土真宗は、沖縄に伝えられている仏教の中でも比較的に伝来時期が遅く、
先に自力の仏教宗派が伝わっていたことや薩摩による一向宗の禁制、第二次世界大戦等の影響からスムーズに布
教をすることが出来なかった。そのような状況でも現在の沖縄には浄土真宗が存在しており、そこには先人の真
宗僧侶が沖縄特有の風習に浄土真宗を馴染ませる努力をしていたという背景がある。

しかし、沖縄の浄土真宗に関する研究はあまりされておらず、特に浄土真宗の来琉時期や真宗の教えをどのよ
うにして琉球の人々に浸透させていったかについての研究はほとんどされていない。私自身が沖縄の出身である
ため真宗僧侶である父がエイサーに参加したり、一見真宗とは関係ないと思える活動に参加したりということ
の間近で見えてきて、そこに今まで研究されていない真宗が沖縄に馴染むヒントがあるのではないかと思いいこのテ
マで論文を書こうと思った。そのため、この論文では従来から研究されている沖縄の仏教伝来や沖縄特有の風習
について論じた上で、そこから浄土真宗が沖縄にどのような根付いていったかについて考察する。

本論

第一章 沖繩における仏教伝来

第一節 禅鑑

沖繩において仏教は、英祖王^{えいそ}の時代（一二六〇～一二九九年）に禅鑑という僧が琉球に渡来し、浦添城の西に極楽寺（後の臨済宗龍福寺、現存しない）を建立したところから始まる。知名（一九九四）によると、仏教が伝来した十三世紀頃の琉球は、古琉球時代の各地の領主である諸按司^{あじ}らが抗争し、群雄割拠の状態であったという¹。

英祖王は、一二二九年に生まれ、一二五三年に二十五歳で摂政になり、一二六〇年に三十二歳で王位を継承した。彼は、耕地の改革を行い、役人の給与も公平にし、法律制度も整備したので、この時代は平和を謳歌する歌が巷に溢れたという²。禅鑑の人物像については資料が残っておらず、現代でも禅鑑に関する研究はほとんどなく、詳細は不明である。宋から来た僧侶であることや、僧名から禅宗の僧侶ではないかという推測がなされているが、実際に禅鑑がどのような仏教を沖繩にもたらしたかは定かではない。宗教については、霊的能力で占いや治療を行う民間巫者であるユタとは違う主に村落祭祀を司祭するノロという宗教者がいたという³。

禁 敵

第二節 真言宗

禅鑑以降、察度王の時代（一三五〇～一三九四年）に、薩摩の坊之津の一乗院から頼重法印という僧侶が渡来し、波之上に建立された護国寺の開山住持となり、真言宗を沖繩に伝えた。一乗院は薩摩にあった六〇〇余の真言宗の寺院の中でも最も古く、大乘院、大興寺とともに薩摩の真言宗三大寺の一つとされている⁴。しかし、知名（二〇〇八）によると、護国寺について、建立された年代の記録がなく、護国寺の創建は、後に来琉する日秀であり、頼重は開山住持ではないという。また頼重がいつ来琉したか、頼重自身が真言宗の僧侶であったか等について資料はない。明確なのは、頼重が一三八四年に入寂したことである。「洪武十七年（一三八四年）八月二十一日に入寂」⁵と記されている。また、島尻（一九八〇）によると、護国寺の開山を頼重とし、第二代以降の記録がなく、次に書かれた住持が頼玖（一五四八年、嘉靖二十七年戊申四〇八日）からとされており、頼重入滅（一三八四年）から頼玖までの一六四年の空白があることは、その間波之上に護国寺が存在しなかったからだという⁶。日秀は真言宗の紀州智積院から来琉した僧侶で、主に庶民を相手に布教をしていた⁷。日秀の生誕と入寂について、一五〇三～一五七七年の九月二十四日⁸とされ、名幸（一九六八）は一四九四～一五七七年の九月二十四日⁹としている。来琉時期は明確ではないが、一五一九年に首里坂下の茶屋崎に梵行一字を刻んだ石碑を建てた¹⁰とあることから、二十五歳の時には来琉していたと考えられる。他の日秀の琉球における活動については、知名（二〇〇八）によると、一五二二年に金武観音寺を創建し¹¹、那覇において、弥陀・薬師・観音の三尊を自刻して波上に護国寺を創建した¹²。浦添の高嶺に「金剛嶺」石碑を建立、那覇の東西の境に夷堂を創建、護国寺に大日如

来堂を建立、那覇の東西の境に地藏堂を創建（一五三九年）¹³、湧田（那覇）の地に地藏堂を創建（一五三八年）

¹⁴、辻村の地に西照寺を創建、若狭町（那覇）に地藏堂を建立、若狭町に夷殿を建立などが挙げられる¹⁵。

以上のことから沖縄において、十六世紀頃には真言宗は一定の広がりを見せていたことがわかる。

第三節 柴山の禅宗と芥隠の臨済宗

一四三〇年に中国（明）から冊封使の柴山（こうざん）が琉球に渡り、禅宗の大安禅寺（場所不明）を建立した¹⁶。それ以前に柴山は、『明実録』によると一四二五年（洪熙元年）の二月の辛丑、『訳注中山世鑑』では一四二八年（宣徳三年）の戊申の年（どちらの年号に渡来したかは定かではない）に明皇帝の命で尚巴志王を琉球国王に任命するために琉球に渡っている。大安禅寺は、明の崇禎九年（一六二八年）「隠元禅師が従持して黄檗禅を弘めた」¹⁷とされており、このことから大安禅寺は禅宗の中でも黄檗宗であるという可能性が高いとされる。大安禅寺には後継者がなく、後に真言宗に改宗し、寺名も大安禅寺から大安寺に変わっている。琉球で大安禅寺（黄檗禅）が衰退していった原因については、大安禅寺が建立された約二十年後に芥隠（かいいん）禅師が来琉し、尚泰久王（しょうたいきゆう）以降五代にわたって厚い信頼を得たということから琉球で臨済宗が盛んになり、黄檗禅が次第に衰退していったと考えられている¹⁸。そして、一四三三年に柴山が再び琉球に来島し、千仏霊閣（場所不明）が建立された¹⁹。

景泰年間の一四五六年、第一尚氏第六代国王である尚泰久王の時代（一四五四〜一四六〇年）に京都から薩摩の宝福寺を経由して臨済宗の僧侶である芥隠禅師が渡来した。沖縄に初めて臨済宗を伝え、広厳寺・普門寺・天

龍寺の開山住持になった。芥隠は尚徳・尚円・尚宣威・尚真の五代にわたって琉球で仏教の布教に努めた。芥隠の主な布教の対象は沖縄の上流階級であった²⁰。一四九二年、尚真王の時代（一四七七〜一五二七年）には尚真王が臨済宗の円覚寺を創建した。円覚寺でも芥隠が開山住持になった。円覚寺は、尚真王の父である尚円王を祭るために建てられた寺院であり、禅宗七堂伽藍の形式を備えた琉球第一の巨刹であるとされている²¹。

第四節 袋中と浄土宗

琉球における浄土宗の歴史は一六〇三年（慶長八年）に袋中（一五五二〜一六三九年）が来琉したところから始まる。琉球新報社（一九九八）によると、袋中は奥州出身の浄土宗名越派の僧侶で、一六〇三年から三年間琉球に滞在し、琉球にサツマイモの栽培や砂糖の製法等を広めた儀間真常ら多くの信徒を獲得し、念仏者が琉球に発生する下地を作った人物とされている。琉球滞在中の三年間で桂林寺の住持になり、現在の沖縄の伝統芸能であるエイサーの基となる念仏踊りを伝えるなど、琉球の仏教だけでなく、琉球史に大きく貢献した²²。

名幸（一九六八）によると、袋中は一五六五年（永禄八年）に十四歳で陸奥の浄土宗能満寺の存洞良要のもとで出家し、袋中良定と名乗るようになった²³。出家後、浄土宗の如来寺等の養成所で名越派の浄土教を学び、その後は天台宗総本山延暦寺に登り、法仙僧正のもとで天台宗の密教の奥義を極めた。他にも袋中は梵語も学び、二十歳にして『梵漢対映集』を著した。そして、一六〇三年に、明に渡るために三年間琉球に来琉した。袋中が琉球に渡った目的は、琉球に浄土宗を伝えることが目的ではなく、中国へ行く便船を待ち、その乗船許可を得て

留学することであった。袋中が来琉した当初は、琉球には禅宗や真言宗のような自力宗が隆栄していたため、浄土宗の他力の考えを広めるのに苦心していたと考えられている²⁴。琉球滞在中、袋中は、現在の那覇にあたる垣花村の地頭儀間真常から篤い帰依を受けた。そのため、布教の拠点を垣花に置き、そこで歌念仏等も広めていった。さらに、当時の琉球国王の尚寧王からも篤い帰依を受けており、一六〇三年に那覇の松尾山の麓に浄土宗の桂林寺を建立し、桂林寺の開山住持に任命された²⁵。また、宜保（一九九七）によると、まず、袋中が記した『琉球国由来記』には、「念佛 本国念佛者、万暦年間 尚寧王世代、袋中ト云僧（浄土宗、日本人。琉球神道記之作者ナリ、渡来シテ、佛経文句、俗にヤワラゲテ、初テ那覇人民ニ傳フ。是念佛の始也。」²⁶と、念仏の始まりについて書かれている。袋中は一六〇五年に、『琉球神道記』を著した²⁷。小峯（二〇一四）は、袋中は帰国後に『琉球神道記』を執筆したとしている²⁸。以下ではこの『琉球神道記』について述べることにする。

第五節 『琉球神道記』について

『琉球神道記』は、琉球宗教の古典、琉球宗教の総記とされ、全五巻からなる。第一巻には社会の源流を知らせるために須弥山、四禅、四空処四州を明らかにしており、第二巻では竺土の解釈について明らかにしている。第三巻は震旦について著されている。第一〜三巻までは宗教知識について著されているが、第四巻は当時の琉球の伽藍の御本尊の安置場所の行跡等の仏教知識について著されており、そこには現存しない寺院も書かれている、当時の琉球の寺院について知ることができる貴重な史料である。第五巻には、当時の琉球の神祇等の琉球固有の

宗教について著されている²⁹。島村（二〇一四）は、『琉球神道記』の二つの説について触れている³⁰。まず琉球が龍宮である説について、『琉球神道記』の第五卷「キンマモンのこと」に龍宮が出てくる。キンマモンとは琉球の守護神で、毒蛇を操って罰を与える蛇の長である³¹。そこには琉球に人がいなかった時に天からシチリキユとアマミキユが降りて琉球の土台を作り、当時の琉球に火がなく龍宮に請うたとされている。袋中は琉球の由来を「龍宮」の音読みであると考えており³²、龍宮を「寒くなく、暑くなく、草木四季とも萎まず、人心は柔順」³³であると説明している。また、『琉球神道記』第五卷「キンマモンのこと」には、キンマモンは陰陽の二神おり、これらのキンマモンは弁財天であり³⁴、龍宮から火がもたらされて国が成就した後に現れたとされている³⁵。

袋中が滞在していた当時の琉球の宗教状況に関する『琉球神道記』の記述について原田（二〇〇一）によると、『琉球神道記』第四卷には、袋中滞在当時の琉球に釈迦牟尼仏を安置されていた寺院は、一四九四年に建立され、芥隠が開山住持になったが沖繩戦で焼失した天徳山円覚寺・景泰年間に建立され、安潜が開山住持となったが明治に廃絶した妙高山天界寺・景泰年間に建立され、昭和初期に廃絶になった霊芝山建善寺・尚泰久王の時代に建立されたとされ、『琉球国由来記』を著された時には廃寺になっていた相国寺・円覚寺の末寺で『琉球国由来記』が著された時点で廃寺となっている報恩寺・護国寺の末寺である現在は廃寺となっている真久山善興寺の六寺院である。この六寺院に共通することは、現在廃寺になっていることと、現在の那覇に建立されたということである。そのうち、善興寺以外は首里に建立されている。宗派に関しては真言宗の善興寺以外は臨濟宗である³⁶。そして、文殊師利菩薩を安置していたのは浦添にあった臨濟宗の天徳山龍福寺である。龍福寺は、禅鑑が琉球

に仏教を伝来した際に浦添城の西に建立された極楽寺が焼失した後、浦添城の南に移建復興した寺院である。芥隠が開山住持になったが、龍福寺も島津の琉球侵略の際に放火された。その後、尚寧王によって再び復旧されたが、大正初期に廃寺になった³⁷。

他にも、『琉球神道記』には成化年間に尚円王によって建立され、明治年間に廃寺になった臨濟宗の福源山天王寺は多門天（毘沙門天）が本尊だったということが記されている³⁸。また観世音菩薩の信仰もあつたと見られ、本尊とした寺院は、袋中が琉球滞在中に住んでいたとされている桂林寺などを含め十一寺院であつた³⁹。その他、『琉球神道記』の第四巻に著された当時の本尊が置かれていた琉球の寺院が記されており、阿弥陀如来が本尊とした、真言宗の西福寺・『琉球国由来記』に廃寺として挙げられている建忠寺である⁴⁰。薬師瑠璃光如来を本尊とした、臨濟宗の天龍寺・真言宗の東光寺・東寿寺・『琉球国由来記』に廃寺として挙げられている広徳院の四寺院⁴¹、大聖不動明王を本尊とした、熙山周雍きざんしゅうようが開山住持の安国寺⁴²、地藏菩薩を本尊とした『琉球国由来記』の時点で廃寺となっている妙巖寺・天王寺の末寺である可能性がある地福院と成徳院の三寺院である⁴³、虚空蔵菩薩を本尊とした『琉球国由来記』では廃寺の金福寺である⁴⁴。弥勒菩薩を本尊とした『琉球国由来記』では廃寺の臨濟宗の普門寺である。ちなみに普門寺はもともと観世音菩薩が本尊であつたとされている⁴⁵。

『琉球神道記』第五巻には、主に琉球特有の権現や神について著されている。

以上、沖縄における仏教の伝来から浄土宗の発展までを概観した。この『琉球神道記』ができた十七世紀はじめには、浄土真宗は沖縄には届いていなかった。しかし、もちろん念仏は浄土宗とともに届いており、後述する

ニンブチャーがそれを担っている。その後、浄土真宗が入ってくるまで、沖縄ではこのニンブチャーやエイサーという浄土宗とも浄土真宗とも言えない、沖縄特有の文化、宗教と念仏があわさったものが広がり、現代に保存されている。それでは、浄土真宗が入ってくるまでに念仏ほどのような変化をたどったのかについて、以下に見ていくこととする。

浄土宗

第二章 ニンブチャーとエイサー

第一節 袋中帰国後の沖縄の浄土宗の展開とニンブチャー

袋中の三年間の浄土宗布教の中で、琉球の産業を支えた儀間真常の功績は大きい。浄土宗の経典の内容を方言に訳して教えたこともあって、念仏や歌念仏が広まることとなった⁴⁶。その後、熱心な信者によって浄土宗の教えは受け継がれたが、指導者不在であることや薩摩の一向宗禁制の影響で次第に浄土宗は形骸化した。袋中以降、浄土宗に関する記述として、一六一一年に尚寧王^{しょうねい}が帰国した袋中に袋中上人像を画いて贈ったという程度である⁴⁷。しかし、一方で、この後ニンブチャーと呼ばれる念仏者が現れることは注目すべきである。ニンブチャーとは、知名（一九九四）によると、「浄土宗の教えを忠実に信仰・布教する」というよりも、葬儀に招かれて訃音通知の鉦を叩き、念仏あるいは念仏歌を唱えて死者を供養し、葬儀に欠かせない存在として念仏を伝えていた⁴⁸という念仏者として琉球の宗教社会に定着していった。ニンブチャーは、宜保（一九九七）によると、元は人形操

りを職業とする集団が室町時代の頃に琉球に渡り、当時遊芸人の村として知られていた首里の久場川の行脚村あんじやに拠点を置いたところから始まるという。その集団が、浄土念仏を芸に取り込み、葬祭の時には念仏を唱えるようになったことからニンブチャーと称するようになったとされる⁴。古谷野（二〇一一）によると、ニンブチャー

は、死人の家で小屋か雨戸を立てかけて作ったところに鉦をつるし、鐘を打ち、時折死人の枕元に来たり、彼世の案内めいたことを語ったりする。そして、鉦を打ちながら葬列の末に加わり、墓でも念仏を唱えたという⁵。

一方、琉球にはニンブチャーと似た活動をするチョンダラー（京太郎）という念仏者がいた。チョンダラーは現代の沖縄の伝統芸能であるエイサーの盛り上げ役として知られているが、元はニンブチャーのように念仏歌を唱え、葬儀にも関与していたという。しかし、チョンダラーとニンブチャーの関係については、不明な点が多く、ニンブチャーのように門付芸を職業としていたが、チョンダラーの念仏ほどの系統であったかなどあまり解明されていない¹。伊波（一九三五）は、チョンダラーについて「室町時代に、日琉の交通の頻繁であった頃、日本の為政者や記録家の知らぬ間に、七島灘を越えて沖縄島に移住した、千秋萬歳を祝する低級伝道者の群れがあった。彼等は多分毛坊主に類する念仏団体の一味の者で（郷土研究第二巻連載、柳田國男先生の「毛坊主考」参照）、彼等の子孫は萬歳又は行脚と称し、首里郊外の安仁屋といふ特殊部落に住して、俗に京太郎と呼ばれている」²と述べており、ニンブチャーとチョンダラーは同じだったという可能性もある。

酒井（二〇〇五）によると、ニンブチャーは浄土宗起源とされる念仏者であり、十七世紀以来の沖縄社会に根付き、死のケガレを祓うためになくてはならない存在だった³。大正時代のユザ（沖縄市）では、富裕者は僧侶

を呼ぶこともあったが、普通はニンブー⁵⁴（念仏者）だけですが、定によれば、葬列に付き従う念仏者は士族層の場合は二人、下層の諸士は余裕がなければ一人、百姓は原則として一人だが無しで済ませてもよい、とあり、士族層は念仏者を招くことが義務づけられていた⁵⁵。

ニンブチャーが葬儀に関与するようになったのは、知名（一九九四）によると向象賢^{しょうじょうけん}が「葬礼之定」を通達した一六六七年と『法式』が通達された一六九七年の間だとされる⁵⁶。そうすると、袋中は一六三九年には逝去しており、ニンブチャーが袋中時代から葬儀に関わったとは考えにくい。それでもニンブチャーの念仏の系統については、古谷野（二〇一一）は、「登野城村の宮良善勝が公用で首里王府に出仕した際、首里郊外のアンニヤ村にいつてチョンダラーから盆行事に歌う浄土宗の教えの道を説いた念仏を稽古して、これを少々改良改曲してつたえたのが八重山の無蔵念仏である」⁵⁷とされ、やはり、浄土宗の念仏であったと考えられる。

ニンブチャーは、地域によって多少違いもある。石垣では、古谷野（二〇一一）によると、昭和十五年までは死者の出た家ではニンブジイ（念仏者）と称する者へ念仏鉦叩きを依頼していた⁵⁸と、ここまでは本島のニンブチャーと同じだが、八重山は葬式を「ピーピイトイヌミチ」（一度しかない最後の日）という慣習を重要視した。これは会葬人の行列の長さで、葬式を価値づけ、葬式の行列は墓までも届くほどの会葬人だったと評されるものである。そこで、石垣のニンブチャーは二番座の正面庭や門口近くに幔幕や板などで日覆を作り、その内に鉦を吊るし、出棺間際まで、時々、間をおきつつ鉦を叩き、葬列の後方から鉦を叩きながら墓所まで送った。そのことから、ニンブチャーの念仏鉦の音は極楽を祈るための道具だけでなく、死亡通知の役割も果たしていた⁵⁹。

八重山の他の島々のニンブチャーについて、黒島で最も大きい東筋部落では、「葬式にナムマイダはない。坊さんは来ない」⁶⁰とされているが、「昔は廊下で鉦をずっと叩く人がいた」⁶¹という。そして、伊古部落にもニンブチャーのように鉦を打つ専門の人がいたとされ、その専門家をウクヤーのモイリザアと呼んだ。ニンブチャーと同様にウクヤーのモイリザアは葬式に呼ばれ、亡くなると遺体を二番座に寝かせ、その周囲には白黒の幕を張り巡らしたが、その幕のそばぎりぎりのところの廊下に紐で鉦を吊るして叩いたとされている⁶²。

竹富島では、念仏は死骸を囲った幕の外側で鉦を打ち経をあげるとされており、入棺後の告別式では部落ごとに置かれた念仏係りが念仏を唱え、念仏鉦を鳴らして吊った。葬儀は集落単位で役割分担されていたが、念仏鉦だけは同じ人が担当していた⁶³。小浜島でも、昭和十五、十六年ごろまでは葬列が通るときに、お経を上げながら鉦を叩いた人がいたとされている。ちなみに、小浜島で鉦をシヨンコンといい、葬儀でシヨンコンを叩く人を坊主さん、坊さんと呼んだ⁶⁴。ちなみに、西表島と与那国島にはニンブチャーはいなかったと考えられている。そして、念仏鉦を叩く風習は石垣島だと一九四〇年ごろ、黒島、竹富島、小浜島でも一九四〇～一九五〇年ごろには無くなっている。しかし、波照間島では一九八〇年ごろまでサイシと呼ばれる念仏者が鉦を叩いていた⁶⁵。大城（二〇一八）によると、ニンブチャーは明治維新の際の琉球処分をきっかけに徐々に衰退したが、戦後間もない頃まで活動していたとされている⁶⁶。

第二節 エイサーについて

エイサーとは、沖縄の念仏踊りとして知られているが、琉球新報社（一九九八）は「沖縄本島中部を中心に、全域に広がる野外の集団舞踊。念仏踊り系統の踊りで、最初に継親念仏や無蔵念仏が歌われ、その後、十曲前後が続く。語源はエサオモロのエサとか、ハヤシからともいうが、定かではない」と述べている。知名（一九九四）は、エイサーと呼ばれるようになったのは明治以降だと考えている。ちなみに伊波普猷い は ぷ ぐ ちうらの論文には昭和初期からだと言及しており、エイサーと呼ばれる前の近世琉球では「似念仏（ニセニンブチ）」や「念仏（ニンブチ）」と呼ばれていたとされている。山内盛彬の説によると、琉球の盆踊りは、盆踊が仏教の精霊会である事、最初の演技が念仏歌の継母念仏に似て居る事、酒を呑めない子供も酒甕を担いで布施を貰って歩く事からして、念仏と関係が深いことがわかるとしている。さらに山内は、袋中について、鎌倉時代以降に発生した俗謡風に唱えた歌念仏を心得て居たとし、教義を通俗的に訳し、何十種類という琉歌念仏を作り、その歌にフシをつけて歌うようにしたと述べる。そして、袋中以降は、テラシカマガチという念仏の作歌者が現われた。有名な楽人の知念（一七六一〜一八二八）の代には、首里の市では盆祭になると念仏者を招いて念仏歌を歌わせて精霊を供養させる風習があった。その招かれる念仏者は萬歳踊をやっている京太郎を兼ねている半乞食だった。ある日に某大名が知念に対して、念仏歌は楽器には載せられないかと問うて、知念は三絃に上乗せして作曲したのが、盆踊りの初めに演じるエイサー節であって、これは継母親念仏の歌を改造したものである。念仏歌に三絃を使うようになったため、益々念仏歌は民衆化されていった。この頃、田舎では念仏者を呼ぶことは贅沢であるとされてい

たため、村の若衆や乙女等が自ら踊って供養したという。エイサーの名称については、盆踊りの最初のハヤシにエイサーを繰り返されることからつけられた名称であるとされている。なぜ念仏歌の次の曲からは念仏と関係ない民謡であるのに総称的にエイサーといわれるのかについては、盆踊りは元々念仏歌のみであって、他の民謡は降代余興的に添加されたからであると説いている⁶⁹。

次に宜保榮治郎によれば、袋中が布教し、帰った後に安仁屋村の下級僧が村々を巡って念仏を唱え、さらに京太郎となって千秋萬歳なども踊ったとされている。ちなみに、この下級僧とはおそらく日本から来た遊芸人のことであろう。近年のエイサーについては目的が不明確になってしまっているが、島尻の具志頭の一帯では、祖先の供養のみがはつきりとしていると指摘する⁷⁰。

第二十一回沖縄全島エイサーコンクール開催要綱によると、エイサーの歴史は古く、沖縄の古典である「おもろそうし」には、約六〇〇年前の琉歌があり、その十四巻には「いろいろのえさおもろ御そうし」という題目の「えさおもろ」というのが「エイサーオモロ」であるという。念仏踊りが入る以前はこの「おもろ」を歌ってエイサーが踊られたと考えられており、今の「久高まんじゅう主」などはその名残とされている。このことから、袋中が来琉する以前から琉球にエイサーは存在しており、袋中が琉球国民に浄土宗をわかりやすく伝えるために、エイサーに目を付けて念仏踊りを琉球の方言に訳して伝えたと考えることができる⁷¹。

また、西郷信綱は、「えさおもろ」について、「十四世紀から、社会の表面に花々しくおどり出した英雄をたたえ、或いは世間の評判になった事件」をうたっているものとしており⁷²、「えさ」はエイサーにつながっている

と考えている。しかし、「えさおもろ」でたたえられているのは地方の城主の按司であり、それが念仏踊りに変わっていったのは、「えさおもろ」が単なる世俗の歌ではなかったからと言う⁷³。当初のエイサーは五穀豊穰祈願と慰霊を兼ねて、唯一の農村娯楽として伝えられたとされている⁷⁴。

現在のエイサーは、従来の念仏踊りという概念は薄く、七月の旧盆に行われる沖縄の盆踊りというイメージが強い。地域によって形態や道具に多少の違いがあるが、主に各地区の青年会が、旧盆の夜中に地域内を踊りながら歩いたり、沖縄の最も大きなイベントの一つである「全島エイサーまつり」で踊ったりする。その実行委員会オフィシャルサイトによると、沖縄市の青年会のエイサーの形態は、三線を弾き歌い、踊り手のテンポをリードする役割である「地方（じかた）・地謡（じーうてー）・音頭取りの役割を担い、重量があるため体の大きさと体力が要求され、ダイナミックな演技を必要とされる「大太鼓」・エイサーの華とされており、その大胆さと細やかな演技のそろい具合の圧巻さは見る者を引きつけると言われている「締太鼓」・エイサーの踊りの基本とされている手踊りで、これができないと太鼓を持たせてもらえないと言われている「イキガモイ（男手踊り）」・女性が担当する手踊りで、力強いイキガモイに対してしなやかな踊りの中に手先の緩やかな動きで踊りに華を添える「イナグモイ（女手踊り）」・旧盆の際に列の先頭に立ち、重量のある旗を曲のリズムに合わせてテンポよく上下に振る青年会の顔とされている「旗頭」がいる。ちなみに、旧盆の際に踊りながら道を歩いている時に他の青年会と鉢合わせになると、ガーエーと言われる言い争いが始まる。ガーエーの際には相手の旗頭と競い合うようにアップテンポで旗をなびかせる。そして、従来の働きとは違うが、エイサーには観客を盛り上げるなどの道化

的な役割を果たす「サナジャー・チョンダラー」⁷⁵がいる⁷⁵。

以上、エイサーは袋中が琉球する以前から存在していたという説や袋中が伝えた念仏や念仏踊りをきっかけにエイサーが発展していったという説等について述べてきた。そこから、袋中が琉球に伝えた念仏踊りは空也上人の系統である可能性が浮上してきた。

エイサーは袋中の念仏から発展し、山内盛彬によれば、袋中は鎌倉時代以降に発生した歌念仏を心得たという⁷⁶。おそらく、その歌念仏とは一遍の踊り念仏のことであろう。牛山ら（一九九〇）によると、一遍の踊り念仏が最初に紹介されたのは一二七九年である⁷⁷。踊り念仏の初めは空也であり⁷⁸、牛山ら（一九九〇）も「一遍の「踊り念仏」は、空也にならって発祥したとの説が強い」⁷⁹と述べている。そして、空也の踊り念仏の特徴に鉢叩きがある。この鉢叩きは空也が初めだとされ⁸⁰、前述のようにニンブチャーも葬儀や念仏を唱える際は鉦を叩くという共通点があり、現代におけるエイサーの太鼓を叩くという行為は、空也発祥の鉢叩きからきていると考えられる。以上の点から、袋中が琉球で伝えた念仏や念仏踊りは空也由来の可能性が考えられる。

第三章 沖繩の浄土真宗

第一節 真宗の伝来と仲尾次政隆

沖繩の浄土真宗は、本願寺沖繩開教事務所（一九九四）によると、一八一二年に京都西本願寺の末寺である京

都油小路正光寺より、薩摩の中村家へ贈られた御本尊と經典が、子孫の仲尾次政隆へと密かに伝えられたことから始まるとされている⁸¹。一六〇九年に琉球が薩摩の支配下になったことで一向宗が禁止になり、公に真宗を広められなかったため、公式記録が乏しく、詳しい経緯等は不明であるが、仲尾次政隆が沖繩に真宗を広めたことは多くの文献や資料で一致する。名幸（一九六八）によると、一六五九年に「一向宗（浄土真宗）切死丹宗（キリスト教）を禁じ神徳寺に於いて札改めを行いその時、沖繩役人は薩州に対し、キリスト教、一向宗を信ずる者を取りしめる旨の起請文を提出せしめられる⁸²という。薩摩が一向宗を禁止した目的は、薩摩が元々真宗に対して警戒心を抱いていたので、日本から琉球にキリシタンや真宗門徒が入るのを防ぐ、又は琉球国民が支那や南方諸国に行つてキリスト教等を信仰しないように警戒したからである⁸³。ちなみに、一七五五年に「一向宗、切支丹宗禁止令、再び公布される⁸⁴という記述がある。

仲尾次政隆は、尚瀨王の時代（一八〇四〜一八三四年）に那覇の泉崎で一八一〇年に生まれた。十七〜十八歳の頃に正光寺の八木正蔵と文通し、教化を受けた後に本山で帰敬式を受け「釈了覚」として真宗の僧侶となった⁸⁵。仲尾次の幼少期の一八二四、五年頃には知念仁屋が上国の際、薩摩の町田監物の家来で琉球館出入りをしている遠矢仲八という者から一向宗の本尊を琉球に持ち帰った。そのことが一八三九年に発覚し、知念はしばらく監禁された。これを「知念仁屋仏像持下り事件」という。琉球における一向宗の法難事件は三度発生したが、この「知念仁屋仏像持下り事件」を琉球の真宗の第一次法難事件としている⁸⁶。島尻（一九七七）によると、この事件が仲尾次に影響を与え、十五、六歳の頃から真宗の信仰をもつようになったという⁸⁷。その後、仲尾次は二十八歳

で間役、三十歳で冠船寄筆者と御兵具当、三十歳で大和横目、三十五歳で那覇総横目、三十七歳で再び大和横目という役職に就き、四十一歳の頃には今帰仁の中城地頭職、四十四歳の時は御物城役の候補になったが、これを妬む縁者の我部山口に真宗の布教を告訴された^{8.8}。知名（一九九四）によると、仲尾次が宗教人として最も活動した時期は、一八四四〜一八五三年とされており、三十五歳の頃より辻の遊郭の渡地荒神の前で伝道を開始したという^{8.9}。この時、仲尾次は備瀬知恒と共に遊郭の傾城宅で布教を始めた^{9.0}。当時の仲尾次は地頭職に就いていた^{9.1}。仲尾次はこの遊郭内で仏像や仏具を具え、集まった信徒に真宗の教義を教えていた。その間信徒は、四五〇貫文から二三〇貫文くらいの参銭や志銭と称するものを出し、死者は吊料として二、三〇〇貫文から四、五〇〇貫文を出して、鹿児島島の信徒の仲介によってその髪等を本願寺の墓所に納めていた。仲尾次が布教を初めて約十年で信徒は三〇〇人を超えた。信徒の大部分は女性で、主に遊女や下級の士やその家族だったとされている^{9.2}。仲尾次自身は四十一歳の時には西本願寺に「自督安心書」を披露するほど真宗教義に精通していた^{9.3}。この時に真宗の信者の寄り合いの場になっていたのが中山国廿八日講である（琉球国廿八日講）。この廿八日講は薩摩の久志にもあったようで、中山国廿八日講は久志廿八日講の分講であり、双方は密接に関係していたとされている^{9.4}。知名（一九九四）の史料には、この中山国廿八日講は一八三五年には結成されていたので、仲尾次が遊郭で布教を始める前からそれ相応の真宗の信徒がいたと考えられており、仲尾次は二十六歳の頃には既に真宗の布教を始めていた^{9.5}。仲尾次が二六歳の頃には信者数は講名の使用許可を西本願寺に願い出るほどになっていた^{9.6}。さらに遡ると、知名（一九九四）は一八三三年に仲尾次が八木に差し出した「懇志上納覚」には、中山国

廿八日講という名称の代わりに「総同行中」と記されていることから中山国廿八日講の前身があったと考えており、このことにより仲尾次は一八三三年（約二十四歳）の時点で琉球で真宗の布教をしていたと考えている⁹⁷。知名（一九九四）は、琉球における真宗の伝播は薩州御戸帳講が大きく関わっているということから、薩州御戸帳講が結成された一七七二年から中山国尼講に対して功存から書状が届いた一七八九年の間の十七年間に琉球に真宗が伝えられたと考えている⁹⁸。

その後、仲尾次と備瀬がそれぞれ一八五三年に本尊を移して布教するようになった。仲尾次は自宅に本尊を移したが、その年に縁者である我部山口によつて真宗の布教が密告された⁹⁹。一八五三年は琉球にペリーが来琉した年でもある。そのような経緯から仲尾次は八重山に終身流刑（実際には十一年間）になるのだが、その際に仲尾次は自身の配流日記を記した。ちなみに、幹部十三人も仲尾次同様に八重山に流刑になり、およそ三〇〇人の真宗信徒は所払いや罰金刑となった¹⁰⁰。これが、琉球における真宗の第二次法難事件である。仲尾次の配流日記は、島尻（一九九七）によると、流罪になった十一年間のことが記載されている歌日記とも言われているもので、一二六首の琉歌と五四二首の和歌の計六六八首の歌が記されている¹⁰¹。網川（二〇一六）によると、仲尾次は一八五六年の十二月に流罪の地となっている八重山に着き、それまでの一年半は慶良間諸島に滞在していたとされており、仲尾次の配流日記は、流刑の間の十一年間の仲尾次が生活した当時の慶良間諸島と八重山の民俗や様子が記されている資料となっており、人相学や医術、茶道等を学んだ仲尾次の教養人の部分がよく表れている日記であるとされている¹⁰²。ちなみに、この一向宗法難の時に仲尾次と共に真宗布教をしていた備瀬は「商

用で奄美大島に渡っていた」¹⁰³ということから流罪は免れた。終身流刑とされていた仲尾次が十一年で刑を終えた理由としては、琉球新報社（一九九八）によると宮良橋の架け橋の作成に尽くしたことが大きいとされているが¹⁰⁴、これは仲尾次の教養人と人間性から八重山の村人や役人の篤い信頼を得た結果である¹⁰⁵。

第二節 仲尾次滅後の真宗と第三次法難

その後、仲尾次は本島へ帰還するが、名幸（一九六八）によると、一八六一年に備瀬が奄美大島から帰還して一八七一年に仲尾次が滅した後は、仲尾次の跡を継いで真宗の布教をし、一八七六年の五月十二日に真宗の布教のため来琉した大谷派の布教師である田原法水と共に琉球に真宗の布教をしていった。この年の九月に薩摩では一向宗禁制が解除されたが、琉球は解禁されなかったという¹⁰⁶。東本願寺の資料によると、田原が琉球に渡ったことをきっかけに沖縄における真宗大谷派開教の歴史が始まったとされ¹⁰⁷、川邊（二〇一五）によると、田原は東本願寺から派遣された僧侶であり、田原の後にも琉球に自見凌雲や清原競秀らが派遣された¹⁰⁸。そして、徐々に真宗信者も増えていき、一八七七年前後に再び一向宗法難が起こった。真宗信徒の三七〇人程が処罰を受け、備瀬は仲尾次同様八重山に流罪になったが、途中で難船のため滅した¹⁰⁹。これが、琉球における真宗の最後の法難事件（第三次法難事件）である。ここで疑問に感じるのは、当時、琉球はまだ一向宗禁制が解かれていないにも関わらず東本願寺が真宗の僧侶を派遣したことである。さらに川邊（二〇一五）の資料に田原は「秘密裡に布教を開始した」¹¹⁰と記されていることから、当時の琉球の状況はわかっていたと思われる。川邊（二

○一五）によると、第三次法難事件が発生した後に田原は上京し、大久保利通に法難事件の経緯を説明し、その後、再び琉球に戻り真宗門徒の釈放を巡り藩庁と交渉を続けた結果、真宗門徒に対して行われた裁判は無効となり、真宗門徒は釈放され、罰金も返金された¹¹¹。その後、一八七九年に琉球は沖縄県になり、田原は「真宗禁制令に動き、八二年に布教所を開設」¹¹²した。この一八七九年は、沖縄県になった年でもあり、真宗の禁制が解かれた年でもある¹¹³。ちなみに前年の一八七八年は、片桐信平により日蓮宗が八重山に布教された¹¹⁴。

第三節 真宗信仰解禁と第二次世界大戦

一八七九年に真宗信仰の禁制が解かれ、名称も沖縄県に変わって以降の真宗の展開は、『浄土真宗本願寺派沖縄開教のあゆみ』によると、一八七九年に宮崎の本願寺派願心寺の大河内正念師が沖縄に渡り、一八九八年に鹿児島の善行寺の亀井慈雲師も来沖し、一九一〇年まで沖縄で布教。同じく一九一〇年の十一月二十一日に鹿児島の光永寺の菅深明師が来沖し那覇説教所を開き真宗の布教を始めた¹¹⁵。ちなみに、名幸（一九六八）の資料では、亀井と思われる真宗の布教師は一九〇一年の十二月に来沖したとされている¹¹⁶。そして、田原が一九〇六年に真教寺住持になり、一九一一年には真教寺内に沖縄自営会を設立、同年八月には真宗本願寺派布教所内に球陽学園を設立して非行少年の感化事業を始める等布教活動の幅を広げていく努力をし、田原と菅が社会事業功労者として表彰される等、徐々に沖縄に浄土真宗を根付かせていった¹¹⁷。

明治時代は順調に浄土真宗を布教していたが、大正に入ると第二次世界大戦の影響で次第に沖縄の仏教は存続

の危機に陥った。一九四四年には、臨濟宗安国寺住持の長岡敬淳と臨濟宗観音堂住持の善国乗宣と臨濟宗万松院住持の松久宗悦と真言宗護国寺住持の名幸芳章が軍人として召集され、一〇月一〇日には、那覇が空襲され、「大典寺、真教寺、臨海寺、瑞聖寺、洪濟寺、善興寺、仙寿院、海蔵院、智福院、袋中寺、妙徳寺」¹¹⁸が焼失した¹¹⁹。翌年一九四五年度の沖繩戦でも「護国寺、聖現寺、神徳寺、神応寺、神宮寺、遍照寺、照太寺、観音堂、蓮華院、盛光寺、西来院、安国寺、円覚寺、崇元寺、吉祥寺、竜福寺、光照寺」¹²⁰が焼失し、さらに「神徳寺住持仲尾次盛孝、神応寺住持上運天弘延、安国寺住持長岡敬淳、吉祥寺住持雪下恵林、瑞聖寺住持善国乗俊、大典寺副住明石深英」¹²¹が沖繩戦によって滅した。第二次世界大戦により、僧侶が兵に出され、寺院や布教所は壊滅状態になり、布教ができる状態ではなかった。

第四節 第二次世界大戦後の沖繩の真宗

第二次世界大戦後は、沖繩で行われた地上戦の影響で多くの戦闘員や非戦闘員の命が奪われ、布教活動ができるような状態ではなかったが、翌年の一九四六年から僧侶は遺骨収集や慰霊法要を行う等の活動をしていた¹²²。この時の僧侶は法衣や袈裟ではなく米軍から支給された軍服を着ており、「そろばん玉の焼け残りを拾って珠数を作ったり、配給された緑色の蚊帳で法衣を作り自転車のベルで打ち鳴らしの鐘に使用したりした」¹²³。沖繩戦により寺院が焼失した僧侶達は政府職員や教員になる等して、その後寺院の復興に着手した¹²⁴。そして、沖繩にいたほとんどの浄土真宗本願寺派の僧侶が戦争により亡くなったが、唯一、藤井深忍が生き残

った。藤井は、沖縄戦後すぐに念仏の声を届けるために弘法伝道に専念し、現在の真宗の沖縄開教の基礎を作り上げた¹²⁵。藤井以降、真宗が沖縄でどのように展開したかについて、沖縄県沖縄市のコザ山球陽寺前任職の帰依龍照氏にインタビュー調査を行った。それによると、浄土真宗を沖縄に馴染ませるために球陽寺は、法事や葬式等を地道に行っているだけでなく、その他にも浄土真宗の教義や教学は譲らずに沖縄の風習を肯定的に捉えるようにしている。沖縄の風習についてマイナスに捉えている真宗寺院が多い中、プラスに捉えていくことで沖縄に真宗を馴染ませる努力をしている。例えば、序論で述べたように沖縄にはウチカビと呼ばれるあの世のお金を燃やして死者にお金を届けるという風習がある。現在、沖縄の真宗寺院においてウチカビを使用することは真宗の本来のしきたりにないため基本的にできないとされているが、球陽寺は全面的にウチカビの使用等の沖縄の風習を肯定している。ちなみに、本来ウチカビは、食べ物を仏壇に供える代わりにその分のお金を仏壇に供えるというものであり、等価交換を意味している。ウチカビを含め、沖縄の風習は時代とともに年々簡略化されている。そのことから帰依氏は、県民にあまり知られていない沖縄の本来のしきたりやルーツを県民に説くことを重要視しており、その中で真宗の教えも説くという活動をしている。

そして、帰依氏は寺院で初めてエイサーを踊らせたのは球陽寺であり、それは沖縄の風習に肯定的であるからという考えだけでなく、エイサーの歌詞の中に浄土真宗の思想が入っていることも関係があるとしている。

まず、エイサーの歌は恋歌とあの世に関する歌の半分ずつであるとし、歌詞に「ナムアマミダビチ」（南無阿弥陀仏）という俱会一処の思想があるとしている。さらに、エイサーの歌詞には一心に念仏を唱えれば浄土に行ける

という解釈がされている節があるとしている。石垣島の念仏踊りであるアンガマ踊りに「ぐふだい念仏」という歌がある。ぐふだい念仏の歌詞の中に「クチュウシぬ 仏に 腰 うされ ナミダヌ 仏に 手 ひかりてい 黄金ぬ 寺までい 渡さりて」¹²⁶とあり、現代語に訳すと「?の仏に腰押され阿弥陀仏に手をひかれ黄金の寺まで渡された」¹²⁷となる。「黄金の寺」が浄土のことを示しているならば、仏によって浄土に連れて行ってもらうという解釈になる。おそらく、帰依氏はこの部分に焦点を当て、エイサーには浄土真宗の思想が含まれていると考えている可能性がある。さらに、帰依氏はエイサーと関係している念仏者と京太郎の違いについて、首里城周辺の貧しい人々で葬儀に関わっていたのが念仏者であり、県外から来琉した遊芸人が京太郎であるとしている。さらに、帰依氏によると沖縄には元々浄土真宗の思想と近いものがあつたとしており、それがユタの思想である。現役ユタである星窪嶽（二〇一一）の資料に「スーコー事や仏壇事は、亡くなった祖先の事であるが実のところは現在生きている私達の事なのです」¹²⁸とあり、これは「今を生きる」という浄土真宗の考えと重なると考えられている。ちなみに「スーコー」とは焼香を意味している。このことから沖縄に浄土真宗が伝わったのは比較的遅かったものの、真宗が伝わる前から真宗の思想がユタによって浸透していたという可能性がある。

結論

沖繩において浄土真宗は他宗派よりも遅く伝わった。浄土宗は十七世紀には伝わっており、念仏の思想は沖繩の土着の文化と融合し、エイサーなどの形で保存された。そのあとに浄土真宗が入り、真宗とエイサーがさらに融合していったと考えられる。薩摩の一向宗の禁制や第二次世界大戦等の影響で余計に沖繩に浸透するのが遅れた。第二次世界大戦以降は、沖繩戦で生き残った唯一の真宗僧侶である藤井を始め、多くの僧侶が真宗布教のために沖繩に渡り、法事や葬式を地道に行い今日の沖繩における真宗の基礎を築いた。しかし、まだ完全に真宗が沖繩に馴染んだわけではない。そのため、現在球陽寺では古くから沖繩に存在するユタと浄土真宗の思想に重なる部分を見つれたり、沖繩の伝統芸能であるエイサーの歌詞に浄土真宗の信心に近い思想を見つける等して、沖繩の風習と真宗の共通点を探している。さらに、沖繩の風習を肯定的に捉え、沖繩の昔の風習を県民に伝え、なおかつ真宗の教義や教学を伝える活動を現在行っている。

沖繩の風習は、戦前から生きていける方や研究者がいるため資料にない事実や出来事を実際に聞くことができるが、沖繩の浄土真宗においては、現在沖繩の真宗を研究している者がほとんどいないため資料を中心にみていくしかない。さらに、資料にも確かな出来事が書かれていないことから、真宗の伝来時期やエイサーの起源等も多くの説が存在している。そのため、あらゆる説を立てることができるが、事実を知ることが難しいと考えられる。幸いにも私の実家が沖繩の風習や真宗を研究し布教しているが、今後さらに沖繩に真宗を馴染ませ定着させるためには、二〇程ある沖繩の真宗寺院の僧侶が沖繩の元来からの風習を肯定的に捉え、そこに真宗の

要素も加えていき、県民に浄土真宗を身近に感じさせる努力をする必要がある。さらに、後世に真宗布教の経緯を伝えるために沖縄の真宗に関する研究をしていく者がこれから必要になると私は考えている。

以上が、沖縄の浄土真宗の展開であり、現在でも沖縄に浄土真宗が馴染むための努力が継続されている。

コピ—廠 本宗

- 1 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』二一三頁。
- 2 諸見友重 『訳注 中山世鑑』六一、六三頁。
- 3 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』二一七頁。
- 4 名幸芳章 『沖繩佛教史』八八、八九頁、二一六頁。
- 5 知名定寛 『琉球仏教史の研究』四八頁。
- 6 島尻勝太郎 「護国寺の創建と日秀上人」、『沖繩大学紀要』一、二頁。
- 7 名幸芳章 『沖繩佛教史』九一頁。
- 8 琉球新報社 『沖繩コンパクト事典』三一二頁。
- 9 名幸芳章 『沖繩佛教史』九四、九五頁。
- 10 名幸芳章 『沖繩佛教史』九一頁。
- 11 琉球新報社 『沖繩コンパクト事典』一三九頁。
- 12 名幸芳章 『沖繩佛教史』九一頁。
- 13 名幸芳章 『沖繩佛教史』九三頁。
- 14 名幸芳章 『沖繩佛教史』九三頁。

著作権フリー

- 15 知名定寛 『琉球宗教史の研究』一五九、一六〇頁。
- 16 名幸芳章 『沖繩佛教史』二一六頁。
- 17 名幸芳章 『沖繩佛教史』一二頁。
- 18 名幸芳章 『沖繩佛教史』一二頁。
- 19 名幸芳章 『沖繩佛教史』二一六頁。
- 20 名幸芳章 『沖繩佛教史』九一頁。
- 21 琉球新報社 『沖繩コンパクト事典』五八頁。
- 22 琉球新報社 『沖繩コンパクト事典』二四四頁。
- 23 名幸芳章 『沖繩佛教史』九六頁。
- 24 名幸芳章 『沖繩佛教史』九六、九七頁。
- 柏原祐泉ら 『日本仏教人名辞典』八二四頁。
- 25 名幸芳章 『沖繩佛教史』二二二頁。
- 26 宜保榮治郎 『エイサー 沖繩の盆踊り』十四、十五頁。
- 27 宜野座嗣剛 『全訳 琉球神道記』一二頁。『琉球神道記』には「大明万歴三十三年龍年四月十五日に編集した」とあるため一六〇五年に書かれたとみてよいであろう。
- 28 小峯和明 「東アジアから袋中の琉球言説を読む」、『立教大学日本学研究所年報』一二、二六頁。

禁本廠

- 29 宜野座嗣剛 『全訳 琉球神道記』 一頁、一一一頁、五七頁、九〇頁。
- 30 島村幸一 『琉球神道記』 にかかわる「琉球言説」、『立教大学日本学研究所年報』 一二、七八頁、八二頁。この記述については『琉球神道記』の第五卷に記されている。
- 31 島村幸一 『琉球神道記』 にかかわる「琉球言説」 八三頁。
- 32 島村幸一 『琉球神道記』 にかかわる「琉球言説」 七八頁。
- 33 宜野座嗣剛 『全訳 琉球神道記』 一四二頁。
- 34 宜野座嗣剛 『全訳 琉球神道記』 一三九頁。
- 35 島村幸一 『琉球神道記』 にかかわる「琉球言説」 八二頁。
- 36 原田禹雄 『琉球神道記』 一〇七、一〇九、一一〇頁。
- 37 原田禹雄 『琉球神道記』 一一三、一一四頁。
- 38 原田禹雄 『琉球神道記』 一一九、一二〇頁。
- 39 原田禹雄 『琉球神道記』 一二一、一二四頁。
- 40 原田禹雄 『琉球神道記』 一三二、一三四頁。
- 41 原田禹雄 『琉球神道記』 一三五、一三七頁。
- 42 原田禹雄 『琉球神道記』 一三八、一三九頁。
- 43 原田禹雄 『琉球神道記』 一四〇、一四二頁。

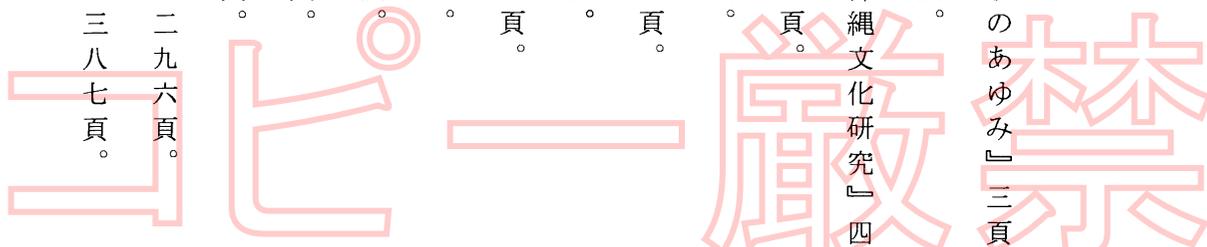
- 44 原田禹雄 『琉球神道記』一四三、一四四頁。
- 45 原田禹雄 『琉球神道記』一四五頁、一四八頁。
- 46 名幸芳章 『沖繩佛教史』一五頁。
- 47 名幸芳章 『沖繩佛教史』二二四頁。
- 48 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』二五四頁。
- 49 宜保榮治郎 『エイサー 沖繩の盆踊り』三二頁。
- 50 古谷野洋子 「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容―波照間島のサイシの事例を中心に―」、『比較民俗研究』二五、九一頁。
- 51 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』二五四頁。
- 52 伊波普猷 「琉球古民謡おほんしゃれ節の研究―竹柏園珍藏の琉歌集中より発見して―」、『文化人類学』一、六七二頁。
- 53 酒井正子 「沖繩諸島の〈葬送歌〉」、『川村学園女子大学研究紀要』二、一二七頁。
- 54 古谷野洋子 「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容―波照間島のサイシの事例を中心に―」、『比較民俗研究』二五、九一、九二頁。ニンブチャーは、ニンブー、ニンブツア、ニンブジイ、ネンブチャー等の呼び方があるとされている。そして、そのニンブチャーは琉球の人々からは卑しめられた存在であり、一般には乞食の頭領くらいに考えられていた。

禁 蔵

- 55 酒井正子 「沖繩諸島の（葬送歌）」一三九頁。
- 56 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』二六五頁。
- 57 古谷野洋子 「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容―波照間島のサイシの事例を中心に―」九三頁。
- 58 古谷野洋子 「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容―波照間島のサイシの事例を中心に―」九三頁。
- 59 古谷野洋子 「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容―波照間島のサイシの事例を中心に―」九三・九四頁。
- 60 古谷野洋子 「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容―波照間島のサイシの事例を中心に―」九五頁。
- 61 古谷野洋子 「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容―波照間島のサイシの事例を中心に―」九五頁。
- 62 古谷野洋子 「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容―波照間島のサイシの事例を中心に―」九五頁。
- 63 古谷野洋子 「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容―波照間島のサイシの事例を中心に―」九六頁。
- 64 古谷野洋子 「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容―波照間島のサイシの事例を中心に―」九六頁。
- 65 古谷野洋子 「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容―波照間島のサイシの事例を中心に―」九七頁。
- 66 大城學 「盆の芸能くエイサー、シチグワチ舞とアンガマとの比較研究く」、『琉球大学法文学部紀要』四、一五頁。
- 67 琉球新報社 『沖繩コンパクト事典』五六頁。
- 68 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』二五五・二五六頁。

- 69 宜保榮治郎 『エイサー― 沖縄の盆踊り』 十四、十五頁。
- 70 宜保榮治郎 『エイサー― 沖縄の盆踊り』 十七頁。
- 71 宜保榮治郎 『エイサー― 沖縄の盆踊り』 十七、十八頁。
- 72 宜保榮治郎 『エイサー― 沖縄の盆踊り』 十八頁。
- 73 宜保榮治郎 『エイサー― 沖縄の盆踊り』 十八頁。
- 74 宜保榮治郎 『エイサー― 沖縄の盆踊り』 十九頁。
- 75 沖縄全島エイサーまつり実行委員会オフィシャルサイト <http://www.zentoeisa.com/about-eisa.html> 十
二月一日。
- 76 宜保榮治郎 『エイサー― 沖縄の盆踊り』 十四頁。
- 77 牛山眞貴子ら 「踊り念仏考―庶民信仰と踊りを手がかりに―」、『日本体育学会大会号』四一A、六一頁。
- 78 坂本要 「踊り念仏の種々相（一）―空也及び空也系聖について―」、『筑波学院大学紀要』十、七一
頁。
- 79 牛山眞貴子ら 「踊り念仏考―庶民信仰と踊りを手がかりに―」六一頁。
- 80 坂本要 「踊り念仏の種々相（一）―空也及び空也系聖について―」七二頁。
- 81 『浄土真宗本願寺派 沖縄開教のあゆみ』三頁。
- 82 名幸芳章 『沖縄佛教史』二二七頁。

- 83 名幸芳章 『沖繩佛教史』一七頁。
- 84 名幸芳章 『沖繩佛教史』二三六頁。
- 85 『浄土真宗本願寺派 沖繩開教のあゆみ』三頁。
- 86 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』三〇七頁。
- 87 島尻勝太郎 「仲尾次政隆の配流日記」、『沖繩文化研究』四、六五頁。
- 88 島尻勝太郎 「仲尾次政隆の配流日記」六七頁。
- 89 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』二九〇頁。
- 90 島尻勝太郎 「仲尾次政隆の配流日記」六六頁。
- 91 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』二八八頁。
- 92 島尻勝太郎 「仲尾次政隆の配流日記」六六頁。
- 93 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』三七二頁。
- 94 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』二九〇頁。
- 95 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』二九三頁。
- 96 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』三五六頁。
- 97 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』二九五・二九六頁。
- 98 知名定寛 『沖繩宗教史の研究』三八六・三八七頁。



- 99 島尻勝太郎 「仲尾次政隆の配流日記」 六六頁。
100 名幸芳章 『沖繩佛教史』 十八頁。
101 島尻勝太郎 「仲尾次政隆の配流日記」 五九頁。
102 綱川恵美 「仲尾次政隆の「配流日記」にみる旅歌」、「大学院年報」 三三、四八頁。
103 『浄土真宗本願寺派 沖繩開教のあゆみ』 四頁。
104 琉球新報社 『沖繩コンパクト事典』 二九四頁。
105 島尻勝太郎 「仲尾次政隆の配流日記」 七五頁。
106 真宗大谷派東本願寺沖繩別院沖繩開教本部 <http://www.zento-eisa.com/about-eisa.html> 十二月一日。
107 名幸芳章 『沖繩佛教史』 二四〇頁。
「沖繩の声に聞く」「命どう宝」 二頁。
108 川邊雄大 「明治期の琉球における真宗法難事件に関する一考察―善教寺資料を中心に―」、「沖繩文化研究」 四一、一五一、一五二頁。
109 琉球新報社 『沖繩コンパクト事典』 三二二頁。
名幸芳章 『沖繩佛教史』 二四〇頁。
真宗大谷派東本願寺沖繩別院沖繩開教本部 <http://www.zento-eisa.com/about-eisa.html> 十二月三日。
110 川邊雄大 「明治期の琉球における真宗法難事件に関する一考察―善教寺資料を中心に―」 一五一、一

禁蔵

五二頁。

111 川邊雄大 「明治期の琉球における真宗法難事件に関する一考察―善教寺資料を中心に―」一五二頁。

112 琉球新報社 『沖繩コンパクト事典』二五三頁。

113 真宗大谷派東本願寺沖繩別院沖繩開教本部 <https://shinran-oki.org/history.html> 十二月四日。

114 名幸芳章 『沖繩佛教史』二四〇頁。

115 『浄土真宗本願寺派 沖繩開教のあゆみ』二二九頁。

116 名幸芳章 『沖繩佛教史』二四一頁。

117 名幸芳章 『沖繩佛教史』二四一・二四二頁。

118 名幸芳章 『沖繩佛教史』二四四頁。

119 名幸芳章 『沖繩佛教史』二四四頁。

琉球新報社 『沖繩コンパクト事典』二二頁、一七一頁。

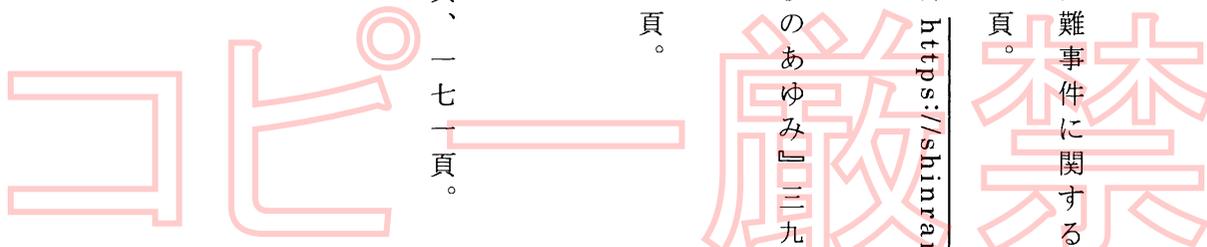
120 名幸芳章 『沖繩佛教史』二四四頁。

121 名幸芳章 『沖繩佛教史』二四四頁。

122 名幸芳章 『沖繩佛教史』二四四頁。

123 名幸芳章 『沖繩佛教史』五七頁。

124 名幸芳章 『沖繩佛教史』五七頁。



128 127 126 125

星窪嶽

『親加那志からクトウユシ

初級編』五二頁。

宜保榮治郎

『エイサー

沖繩の盆踊り』八二、八三頁。

宜保榮治郎

『エイサー

沖繩の盆踊り』八二、八三頁。

『浄土真宗本願寺派 沖繩開教のあゆみ』四一頁。

コピ—廠禁

年表

英祖王時代（一二六〇～一二九九年）

- ・ 禅鑑が来琉し、沖繩に仏教が伝わる。浦添城西に極楽寺建立。

察度王時代（一三五〇～一三九五年）

- ・ 薩摩坊津の一乗院から頼重法印が来琉し、沖繩に真言宗が伝わる。
- ・ 波之上に護国寺建立。

尚巴志王時代（一四二二～一四三九年まで在位）

- 一四三〇年 ・ 明から冊封使の柴山が来琉し、禅宗の大安禅寺を建立。
- 一四三三年 ・ 明から柴山が再び来琉し、千仏靈閣を建立。

尚泰久王時代（一四五四～一四六〇年まで在位）

- 一四五六年 ・ 京都から薩摩を経由して芥隠が来琉し、沖繩に臨濟宗を伝える。

禁

二七

尚真王時代（一四七七〜一五二五年まで在位）

一四九二年 ・ 臨濟宗の円覚寺を建立し、芥隠が開山住持になる。

？年 ・ 紀州智積院から真言宗の日秀が来琉。

一五一九年 ・ 日秀（二五歳）により首里坂下の茶屋崎に梵行一行を刻んだ石碑が建てられる。

一五二二年 ・ 真言宗の金武観音寺を建立。

・ 弥陀・薬師・観音の三尊を自刻して波之上に護国寺を再建。

・ 浦添の高嶺に「金剛嶺」石碑を建立。

一五三八年 ・ 湧田に地藏堂を建立。

一五三九年 ・ 那覇の東西の境に地藏堂を建立。

尚寧王時代（一五八九〜一六二〇年まで在位）

一六〇三年 ・ 浄土宗名越派の袋中が来琉し、沖縄に浄土宗を伝える（三年間滞在）。

・ 那覇の松尾山の麓に浄土宗の桂林寺を建立。袋中が開山住持になる。

一六〇四年 ・ 報恩寺忍文長老、使僧として薩摩へ行く。

・ 安国寺長老、外交使僧として薩摩へ行き島津家久の家督を賀せしめる。

一六〇五年 ・ 袋中により『琉球神道記』が著される。

禁本蔵

・護国寺快雄和尚、神体と神鏡を波之上宮に泰安する。

一六〇六年
・崇元寺長老、外交使僧として薩州へ行く。

一六〇七年
・薩州にて正護寺の頼喜法印、日秀上人の三三回忌法要を行う。

一六〇八年
・薩州島津家久公は大慈寺長老龍雲と広濟寺長老雪嶺の二僧を琉球に派遣し朝鮮征伐のために用いる兵糧供出の促進を迫る。

一六〇九年
・薩州が琉球征伐を決定し、軍船大島に到着した時、天龍寺長老以文、王の命令により薩州との講和条約の使節となり大島へ行く。薩軍運天港に上陸の際、菊隠長老、講和使節となり運天港へ行く。崇元寺にて講話成立。尚寧王、菊隠長老、恩叔長老、薩州軍船にて薩州へ行く。この慶長の役にて広嚴寺、龍福寺、普門寺、天龍寺、仙福寺、慈恩寺、その他多くの寺院、民家等焼失する。

一六一〇年
・万寿寺焼失。

一六一一年
・尚寧王、袋中上人像を画いて袋中に贈る。薩州より琉球へ法令十五条が布告される。

・尚寧王、菊隠、恩叔長老等帰国。菊隠長老の功を賞し、西来院を賜り国相に任じ王子位に進ましめ球陽国師号を賜り知行八百石を支給大里間切の領有を許される。恩叔長老の功を賞し、浮織絡子を賜り隠居米二十石を支給される。

・薩州役人の要望により、宮古島の祥雲寺、権現堂建立。

一六一五年
・再び薩州役人の要望により、八重山桃林寺、権現堂建立。

・宮古、八重山の両権現堂に護国寺快雄和尚は熊野権現と神鏡を奉る。

一六一七年 ・首里観音堂建立。

一六一九年 ・金武王子尚久、中城王子が私資を以て建善寺再建、前円覚寺長老天叟にこれを贈る。

尚豊王時代（一六二〇～一六四〇年まで在位）

一六二〇年 ・菊隠国師入滅。

一六二二年 ・円覚寺経蔵跡に弁財天堂建立。

一六二四年 ・諸社寺御参詣始まる。（波之上宮、護国寺、天尊廟、広厳寺、沖山権現、両天妃宮、龍王殿、長寿宮、長寿寺、天久山、崇元寺廟、神徳寺、八幡宮、荒神堂、円覚寺廟）。

・元旦及び一月十五日は三司官一人、随員三〇一人が円覚寺廟、崇元寺廟に参拝する古例であったが本年より南堂二僧が代表する事と改める。

一六二五年 ・円覚寺丈室と大殿を再建。

一六二六年 ・喝伝長老、円覚寺住持となる。

一六二八年 ・恩叔禅師建善寺を賜り隠居寺とする。護国寺頼翁法印、一紙目録再下付陣情のため薩州へ行く。

一六二九年 ・慶長の役以来、僧侶は薩州以外へ行く事を禁じられていたが、叟山禅師薩州にある時、京都へ行き拝塔の礼を行う事を許される。

禁 殿

二

一六三一年 ・ 西来院の後嗣なきため私寺を官寺に改め。

一六三三年 ・ 波之上宮焼失。

一六三四年 ・ 薩州の平田増宗（慶長の役の副将）の次男、僧となり罪を犯し琉球に流されていたが、勝連にて家久公の命に依り斬刑される。

一六三五年 ・ 波之上宮再建。

・ 護国寺住持頼慶座主と波之上宮神職天願の兩人薩州へ行き諏訪神社佐藤権太夫より神道祭式法を習得する。

・ 頼慶座主、京都に行き仏学と儒学を学ぶ。脱心禅師円覚寺住持となる。

一六三八年 ・ 円覚寺復岩長老を家久公逝去の弔問使として薩州に派遣する。

・ 古来、除夜の時は按司一人諸官を率いて諸社寺で一年の謝恩の礼拝をしたが、この年より廃止する。

尚賢王時代（一六四一〜一六四七年まで在位）

一六四二年 ・ 広厳寺再建、祥岩長老に隠居寺として賜う。この年から普天間御参詣が始まる。

尚質王時代（一六四八〜一六六八年まで在位）



一六四八年 ・袋中上人『琉球神道記』刊行。

一六五二年 ・南陽紹弘禪師（北谷禪師）入滅。

一六五五年 ・風俗改良として葬祭の華美を禁止。

一六五七年 ・八重山の宮良親雲上長重が首里より念仏法を学びて帰り、各村に宣布、葬祭に念仏鐘を叩く。

一六五八年 ・天神木像を池上院に奉安する。

一六五九年 ・一向宗（浄土真宗）切支丹（キリスト教）を禁じ神徳寺に於いて札改めを行い、沖縄役人は薩州に対しキリスト教、一向宗を信じる者を取りしめる旨の起請文の提出を求められる。

・崇元寺大修理を行い、宗廟、丈室、諸廟、山門、厨庫裡等完成する。

一六六〇年 ・広徳寺を私寺より官寺に改め霊室長老を住持とする。

一六六一年 ・古来、一月、五月、九月の社参に僧や神職に品物下賜の例があったが本年より廃止。

一六六二年 ・真言宗の観音寺は禅宗に改宗していたが再び真言宗となる。

一六六三年 ・薩州より寺院の布教を一切禁止し儒学を学習すべき法令が来る。

一六六四年 ・西来院を大淳長老に賜い、その隠居寺とする。

一六六五年 ・忌服令制定。

一六六六年 ・一月三日、七月十四日（盆）には王自らが天界、天王、円覚の三廟に参詣し、若し王に事故ある時は王子代拝を制定する。

禁教

二七

尚貞王時代（一六六九～一七〇九年まで在位）

一六六九年

・王即位以後、中国の衣服で円覚、天王、天界の三廟に拝礼していたが、本年より崇元寺廟参拝も始める事と定める。僧侶の朝賀の制を定め、真言宗は一月四日、禅宗は一月五日とし、護国寺頼昌法印の陣情により神応寺、聖現寺、万寿寺を禅宗より真言宗に改める。啓田長老の隠居寺たる池上院敷地を御用地として公収され、その代替地として長寿寺を賜う。

一六七〇年

・王子以下諸臣の円覚寺廟参拝の日を一月二日に改める。
・諸僧朝賀の日に奏楽を行う制となる。

一六七一年

・頼昌法印、聖現寺に聖観音像奉安し、万寿寺住持になる。天王寺霊道禅師、崇元寺大伝和尚、天界寺山長老、円覚寺空山住持の四僧に対して、各寺の知行増額の陣情を拒否するとの回答あり。

一六七二年

・真言宗の正月の祈願法要を一月一日～十三日まで玉城の下庫裡で行うことを定め、禅宗は円覚、天王、天界の三寺で懺法三三座を行う事を定める。

・一月三日、国王は諸官を従えて三大寺廟拝礼と定める。

・三大寺の知行高は円覚寺六十石、天王・天界の二寺は三十石。

一六七四年

・西照寺の弥陀如来を海蔵院に移す。護国寺頼昌法印、弘法大師像を日本より請来し同寺に奉安する。

一六七五年
・安国寺を久場川より現在地に移建し不動仏殿も併建。
・広徳寺に対し世子尚純公は「普護群生」の額を賜う。

一六七八年
・龍界寺を隠居寺とし、乾叟長老に賜う。

一六七九年
・五月二日、王世子、諸臣、三大寺廟拝礼を定める。

一六八〇年
・神応寺改築、識名宮を洞外に移す。護国寺住持権大僧都法印尊盛和尚入滅。

一六八一年
・沖宮、臨海寺、中山門を瓦葺きに改める。

・頼賢座主、東光寺を若狭町に移建し薬師如来を奉安する。

・真壁宮と権現宮を地元民に再建する。

・弁財天堂行幸親拝の制を定める。

一六八二年
・崇元寺を瓦葺きに改める。薩州の光明寺、琉球所管の寺となり、護国寺末寺になる。

一六八四年
・社寺奉行設置。

一六八五年
・祥雲寺、桃林寺住持を三年交替制とする。薩州より新たに弁財天像を請来して弁財天堂を奉安する。
・神徳寺の不動尊像を護国寺に移す。

一六八七年
・芥隠禅師の二〇〇年忌にあたり円覚寺住持石峰宗実禅師、募金して芥隠禅師の塑像を造り、尚貞王がこれを拝して金蘭袈裟と紫衣を贈る。

一六八八年 ・護国寺は古来、薩州坊之津の一乗院（紀州新義真言宗の別院）の末流であったが、この年、薩州

大乘院の末寺となる。大乘院は新義真言宗醍醐の末流である。

・竜福寺の木像の獅子、農民の田を荒らしたため、獅子田として七畝の田を賜る。

・豊見城王子朝良、久志親方助豊の二人、観音石像を久志村に権現堂を建立し奉安する。

一六八九年 ・真言宗寺院の知行高を改定する。護国寺五十石、臨海寺二十石、神応寺、万寿寺、神徳寺、聖現

寺、神宮寺は十二石

一六九二年 ・護国寺に知事を置く。

・王世子尚益、薩州にて日秀上人像を求めて帰り首里大日寺に奉安する。

一六九四年 ・円覚寺住持蘭田智久禅師の請願に依り、芥隠禅師に国師号を賜り、仏智円融国師とする。

一六九五年 ・天界寺、円覚寺重修終了。

・円覚寺知行高を一〇〇石と定める。円覚寺蘭田長老を島津光久公逝去の弔問使として薩州に派遣。

一六九六年 ・宮古島の大地震で祥雲寺倒壊する。

・護国寺山門に仁王石像を薩州より盛海和尚の題請によって請来。

一六九七年 ・首里大日寺を護国寺に移して大日如来堂とする。

・円覚寺須弥壇の壁画を彩色する。

・際外禅師、福建より観音像と十六羅漢像を請来して円覚寺山門に奉安する。

薩州

・万松院三世脱心禅師入滅。

一六九九年 ・宮古観音堂再建。

・金武村観音寺住持慧朗、新たに紫磨金三尊仏を同時に奉安。

一七〇三年 ・伊江島照太寺、宮古祥雲寺、八重山桃林寺住持、五年交替制と定める。

一七〇五年 ・円覚寺徳叟長老、綱貴公逝去の弔問使として薩州へ派遣。

一七〇六年 ・薩州における宗門手札改めの際に琉球の出家一七五人の記録あり。

尚益王時代（一七一〇～一七一二年まで在位）

？年 ・盛海和尚（黒金座主）、北谷王子の悪政を責めたため、王子に暗殺される。

尚敬王時代（一七一三～一七五一年まで在位）

一七一三年 ・了道、際外、蘭田三長老の編集になる諸寺重修記造改諸僧縁由記出ず。

心海上人、密門諸寺縁起を著わす。

一七一四年 ・琉僧、薩州以外に雲遊禁止とする。

一七一七年 ・釈迦、弥陀、薬師の三像、真壁間切名城村に漂着、これを聖現寺に奉安。

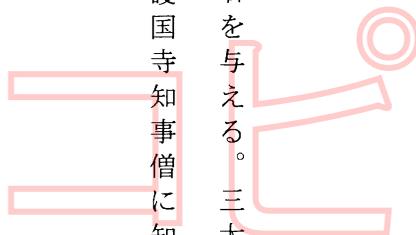
西福寺荒廃したので桂林寺跡に移建。

禁林殿

- 一七一八年 ・ 真玉橋開通式に僧侶三〇〇人列席し供養を行う。
- 一七一九年 ・ 際外宗実（球陽大和尚）仙江院に住持。尚円王忌二〇〇年忌で終り、余の先王は一〇〇年忌までと定める。
- 一七二一年 ・ 釈迦十六善神像を翁長親雲上安在、支那より請来して円覚寺に奉納。
- ・ 円覚寺竜淵殿失火、尚豊、尚質の二王の絵像焼失に依り覚翁住持、八重山に流罪。覚翁の後任として徳叟長老円覚寺三度目の住持となり竜淵殿再建。
- 一七二二年 ・ 円覚廟へ一月二日、七月十四日衆臣の正式参拝を定める。
- 一七二四年 ・ 天久宮を聖現寺鏡内に移建。
- 一七二六年 ・ 久米村の葬式を儒葬にすることを許される。
- 一七二八年 ・ 円覚寺の大殿の仏像を御照堂に移し、御照堂の王の位牌を大殿に移す。
- ・ 仏前に酒を供えることを禁ずる。
- ・ 能仁堂の仏像、仏具を興善寺に移す。
- ・ 隠居堂に対する知行高をその僧侶の位階に応じて贈ることを定める。
- ・ 十二月八日より十四日まで護国寺にて仏名会を行う事定める。
- 一七二九年 ・ 七月十四日は王と群臣、七月十五日は王妃の三大寺廟拝礼を定める。
- ・ 天界寺にて従来、除夜と冬至の前夜、年ごもりの法要をこの年、朝礼に改定。

宗叡藏

- ・ 円覚寺と崇元寺両廟の社参を廃止。
 - ・ 竜福寺、安国寺、慈現院、慎終庵の各寺に初めて知行十二石を支給。
 - ・ 先王祭祀の年、盆まつりに歌舞音曲をする古例を廃止。
 - ・ 僧侶の位階改定。
 - ・ 従来、一、五、九月の三回、王城大台所のかまどの神を護国寺知事に祈らせたがこれをこの年より廃止。
 - ・ 国殿修理の時、従来は真言宗に依り不動尊像（銅板）を梁上に奉納したが、これを廃止し守り札だけにする。
 - ・ 葬礼に用いる牛、豚、赤飯、酒宴のご馳走を簡素化。
 - ・ 竜福寺に王使の参拝始める。
 - ・ 徳叟長老、九月二二日入滅、享年七四才。
 - ・ 三大廟祭典制定。
 - ・ 天王寺を王妃廟と定める。
 - ・ 伊江島照太寺始めて知行十二石を与える。三大寺行幸の時の路次楽を廃止。
 - ・ 円覚寺の照堂僧、僧行者並に護国寺知事僧に知行与える。
 - ・ 墓地、屋敷の坪数制定。
- 一七三〇年
- 一七三一年
- 一七三二年
- 一七三三年
- 一七三五年



一七三七年 ・ 八重山桃林寺義翁長老、仁王像を奉安。

一七三九年 ・ 義翁長老、妙法蓮華経を石に書いて八重山に経塚を造って奉納。

一七四二年 ・ 八重山観音堂建立、桃林寺住持徹道長老経塚建立。

一七四三年 ・ 万寿寺に尚徳王位牌を安置しその子孫に祭祀を行う。

一七四八年 ・ 円覚寺古徹長老、島津吉貴公の弔問使として薩州へ行く。

尚穆王時代（一七五二〜一七九四年まで在位）

一七五五年 ・ 一向宗、切支丹宗禁止令再び公布。

一七五六年 ・ 久米島菩薩堂建立。円覚寺羅山長老を重年公逝去の弔問使として薩州に派遣。

一七六一年 ・ 円覚寺湛玄長老、継豊公逝去の弔問使として薩州へ派遣。

一七六三年 ・ 万寿寺を遍照寺と改称。

一七七〇年 ・ 宮古、八重山、大津波来襲し桃林寺倒壊。

一七七二年 ・ 薩州に於ける宗門札改の統計によれば琉球僧二〇一人との記録あり。

・ 桃林寺再建。

一七七三年 ・ 円覚寺大翁長老を浄岸院の弔問使として薩州へ派遣。

蔵書

二七

尚温王時代（一七九五～一八〇二年まで在位）

一七九五年 ・ 絵師恩河里之子、円覚寺内に尚円王の絵像を画いて奉納。

尚成王時代（一八〇三～一八〇三年の四ヵ月間在位）

一八〇三年 ・ 波之上宮を改修し、三社を一社に統一。

尚灑王時代（一八〇四～一八二八年まで在位）

一八一六年 ・ 英人バジルホール大佐来航、天久聖現寺に四十日間滞在。

尚育王時代（一八二九～一八四七年まで在位）

一八三二年 ・ この年の羽地真喜屋の記録に火葬とあり。

一八三三年 ・ 円覚寺白翁長老を大信院の弔問使として薩州へ派遣。

一八三九年 ・ 一向宗法難事件あり、知念仁屋拘引。

一八四二年 ・ 円覚寺竺胤長老を大慈院の弔祭使として薩州へ派遣。

一八四四年 ・ 宣教師ホールカンシュン、支那人オゴシを聖現寺に留置。英船来島、臨海寺で接待宴する。

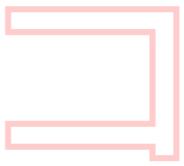
一八四八年 ・ 英国海軍伝道局派遣宣教師、医学博士、ベッテルハイム来島し、護国寺に軟禁。

禁 殿

尚泰王時代（一八四八〜一八六七年まで在位）

- 一八五四年
 - ・六月十七日、米琉通商条約調印、その記念として護国寺の鐘をペルリ提督に贈る。
 - ・ベッテルハイムの後任宣教師護国寺に入る。
- 一八五五年
 - ・一向宗法難事件があり、仲尾次政隆ら十三人が八重山に流刑。
- 一八五九年
 - ・円覚寺単伝長老を順聖院逝去の弔問使として薩州に派遣。
- 一八六〇年
 - ・南殿にて国王、薩州に対し誓詞を行う。この時の奉行は高橋逢殿、検見役は護国寺座主。
 - ・円覚寺玉遷長老、金剛定院逝去の弔問使として薩州へ派遣。
- 一八六二年
 - ・仲尾次政隆等、八重山宮良橋架設の功により罪を許される。
- 一八六三年
 - ・観音寺住持頼源、金武宮厨子と千手観音像（共に陶器製）奉安。
- 一八六四年
 - ・崇元寺修復。
- 一八六六年
 - ・十二月、神徳寺において最後の宗門改め札行われる。
- 一八七一年
 - ・仲尾次政隆入滅。
- 一八七六年
 - ・真宗大谷派の田原法水、来琉。
- 一八七七年前後
 - ・第三次一向宗法難が発生。

禁蔵



一八七八年 ・片桐信平により、八重山に日蓮宗が伝わる。

一八七九年 ・琉球から沖縄県に改名。

・一向宗禁制が解かれる。

・本願寺派の大河内正念が来沖。

一八九八年 ・本願寺派の亀井慈雲が来沖。

一九〇六年 ・田原法水、真教寺の住持となる。

一九一〇年 ・本願寺派の菅深明、来沖。

一九一一年 ・真教寺内に沖縄自営会を設立。

・真宗本願寺派布教所内に球陽学園を設立。

一九四五年 ・沖縄戦によりあらゆる寺院が焼失し、僧侶も入滅。仏教の布教が出来る状態でなくなる。

※以上、本文と名幸（一九六八）の『沖縄佛教史』二一五〜二四四頁を参照。

コヒ 一 廠禁